



第12回国際肝癌学会(ILCA 2018)

小川 力

高松赤十字病院消化器科副部長

第12回のILCA(International Liver Cancer Association)は2018年9月14日から16日まで、イギリスのロンドンで開催され、会場のホテルはHilton London Metropoleであった(写真1)。会場は有名なパディントン駅から近く、熊が主人公の映画『パディントン』はこの駅名が由来となっている(写真2)。会場から徒歩圏内にハイド・パークやバッキンガム宮殿があり、ビートルズが横断歩道を渡っているアルバムのジャケットで有名な、ファンには聖地とされるアビーロードも朝の散歩には丁度いい距離であった。また近くにはおしゃれなレストランも多く、夕食時に歩いていた地元の人におすすめのレストランを聞くと、必要以上の数多くのレストランを紹介してくれて、地元のレストランに誇りを持っていることが窺われた。

今回のILCA 2018は開催地がイギリスであることより欧米からの参加者が多い印象であったが、2017年の

ILCAに比べ日本人の参加者は多く、今回も世界中から肝癌診療のエキスパートが集まり、最先端の発表と熱い議論が行われた(写真3)。

日本からのoralでの発表は、近畿大学の上嶋一臣先生がPresidential SessionでASCO-GIでも報告されたTACTICS trialの結果を再度報告された(写真4)。ご存じの通りTACTICS trialは近畿大学の工藤正俊教授を中心に行われた進行肝細胞癌に対するTACE+ソラフェニブ併用群 vs. TACE単独群の前向き臨床試験で、日本の33施設で行われた多施設共同研究である。

このTACTICS trialはTACE+ソラフェニブ併用試験の有用性が証明された重要な意味をもつ前向き試験であり、2018年1月のASCO-GIでの発表以降、さまざまな学会などですでに報告されているため読者の多くは詳細をすでに理解していると思うため詳細は割愛するが、登録症例156例のTACE単独群とTACE+ソラフェニブ併



写真1 会場ホテルの外観



写真2 パディントン駅内のパディントン像